

---

**魔法少女リリカルなのは** ~ Masked vandals crazy ~

クレド先生

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 〈Masked vandals crazy〉

### 【Nコード】

N1719BA

### 【作者名】

クレド先生

### 【あらすじ】

本来ならこの世界に居る筈のないイレギュラーが、全てをぶち壊しにやってきた！  
撃つ、斬る、バイクをブツ放すとやりたい放題の主人公が原作を壊しながら駆け回る！

この物語は不死身の男兼メタ野郎マサクリ・ブラッドが魔法少女リリカルなのはの世界で大暴れする話である。

Check me out. I'm the ghost of

C h r i s t m a s k i c k y o u r a s s !

(見ておけよ！クリスマスの亡霊がぶっ飛ばしに来たぜ！)

**Bullet・01 その男、不死身につき（前書き）**

はじめまして

そうでない方はお久しぶりです

クレドと申します

メインのデビルメイクライ小説が終わってないのに何をやってるんだ私は…

とりあえずこちらは準メインなので不定期更新が続くと思いますが、できるだけ更新の間隔を狭めていきたいと思えます

そして主人公のモチーフはマヴカブ3でも活躍した

あのクレイジーヒーロー「デッドプール」です

こんなのデッドプールを基にした主人公じゃない！と思う方もいらっしゃるでしょうが、どうぞお付き合いください。

それでは第一話始まります

Bullet・01 その男、不死身につき

男は今此処に生きていることを後悔した。

何故、自分が逃げなくてはいけないのか？

何故、自分の雇ったボディガードが次々殺されていくのか？

何故、誰もあの侵入者に太刀打ちできないのか？

疑問と後悔が男の頭の中を渦巻く。

すぐ隣にいる殺傷設定のデバイスを持った護衛が何かを呼び掛けている。

口の開け方からしてかなりの大声を出しているのだろう。

しかし醜く生き延びようとするこの男の耳には声すら入ることは無かった

男は今まで地位を手に入れる為にどんなことでもしてきた。

人を殺し、人を騙し、人を裏切り…

金に貪欲でもあった。

薬物の快感に溺れ、違法な質量兵器の取引をしてきた。

現にこの巨大な屋敷はその汚い金で手に入れた豪邸だ。

そして時には、管理局の上層部に賄賂を渡し裏世界を生きてきた。

裏口に停めてある高級車へ乗れば、なんとか逃げられる

いや、この逃げ道しかないのだ。

事実上此方の戦力は共に移動している護衛として雇ったプロの二人だけだ。

追いつかれたら必ず殺される

「早くこちらへ！」

やっと脱出用の車が待機している裏口のドアに辿り着いた。

ボディガードの一人が男に此方へ来るよう呼び掛け、鉄製のドアノブを握りしめる。

この扉をくぐれば、

そこには自分をこの地獄から逃れさせてくれる助け船がある。

男に一時の安堵が訪れ、ボディガードが開けたドアを通過して息を切らしながら車に乗り込もうと歩を速めた。

その時

ドゴオオオオツ！！！！！

一瞬にして車が巨大な爆炎に包まれる。

鼓膜が吹き飛ぶかのような爆発音が屋敷全体に鳴り響き、男の心境を安息の域から絶望へと失墜させた。

一気に現実へと戻された男は、  
声も出さず口をパクパクと金魚の様に動かし業火の前に棒立ちしていた。

「きつ、来たぞ！奴だ！」

更に護衛の声を聞き男は自分に死が迫っていることを再確認させられる。

戦闘のプロであるこのボディガードが、  
こちらへ向かってくる人物に怯えているのが半分裏返った声に表れていた。

侵入者は裏口へまっすぐ繋がっている廊下をゆっくりと歩いていた。

そのいでたちは一言で言い表すならば『狂気』

180程の身長に僅かに痩せた体型だが、身のこなしは半端ものではない。

元々の色が赤だったのであろう仮面にまだ乾き切っていない赤黒い

鮮血がべつたりと上塗りされており、仮面の威圧感のある模様も相まって男たちに更なる恐怖を煽っていた。

そして服は血濡れの黒いロングコートとジーンズを身に付けており、手に付けている革製と見られる薄い革のグローブも、鮮血で光沢を失っているブーツも全て黒で彩られている。

両手に握っている銃身の長い二挺の拳銃も、炎から放たれた光を反射する黒だ。

屋敷を燃やす火焰が背景となり、

それはまるで一枚の枠の中に納められた地獄の使者の闊歩を描いた絵のようにも見えただった。

「撃てっ！撃てえ！」

二人の護衛のデバイスから多数の魔力弾が放出、

そして殺傷設定のまま弾丸が侵入者へと猛スピードで放たれる。

侵入者はそれを見ても依然として行動を変えることはしない。

ゆっくりと歩を進め、男の下へ向かって行くだけだ。

グシャッ！

一般人では生理的に受け付けないだろうグロテスクな音を立てながら、

唯一命中した魔力弾が侵入者の喉を貫いた。

直撃した喉は背景が見えるほど大きな風穴と化しており、

侵入者は即死した

筈だった（・・・）

見る見るうちに穴のあいた部分から肉体が再生していき、  
あつと言う間に穴は塞がれ血が大量に零れていることを除けば完全  
に元通りの状態となった。

あまりに有りえない光景を見て護衛の二人は啞然としてしまう。  
男は足を止めると、僅かな音量で言葉を発した。

「Take care.（死なないようにしときな）」

周囲が炎で巻かれそれを煽る風が煩いと言つのに、  
侵入者の声ははっきりと彼らの耳へと届いた。

同時に二人は気付いた。いや気付いてしまった。  
仮面を着けてはいるが、彼の表情がわかってしまったのだ。

侵入者が狂気の笑みを浮かべていることに

BANG!!!

刹那、銃声と同時に護衛の一人の額に銃創が刻まれる。  
そして撃たれた片割れは大量の血を額からスプリンクラーの様に噴  
き出しながら、断末魔すら上げずに地面に倒れ伏した。

「え？」

残された一人がその光景を見て、訳が分からないという意の疑問符  
が声に出た。

そして次の瞬間やつと状況を理解したのか、  
情けない悲鳴を上げながら腰を抜かし、  
少しでも侵入者から離れようと得体のしれない恐怖により動かない  
体を引き摺った。

「ヒ、ヒイアアアア!!」

いつの間に装備したのか、  
侵入者がその手に握っている大型拳銃の銃口が護衛の頭を捉えてい  
た。

「Present for ya! (プレゼントだ!)」

BANG!!!!

銃声と同時に残りの護衛の後頭部にも穴が空き、

護衛は呻き声の様な断末魔の悲鳴を最期にもう動くことは無かった。

「Ha! ホントに裏組織か? 弱えな。アクビが出ちまうぜ!」

まだ硝煙が残っている右手に握った彼の二挺拳銃型ストレージデバイス

マードーバレット

を軽く回しながら、嘲笑の意が入り混じった言葉を吐く。

左手のマードーバレットにも軽いガンスピンをかけ、

地獄絵図と化している背景に似合わぬ口笛を吹きながら、侵入者がここに来た目的である男 密売人 に歩み寄る。

あまり戦闘に関する知識が無いこの男でもわかる。

自分が今腰を抜かして少しでも離れようと後ずさっている原因である、

この仮面の侵入者の持つデバイスが殺傷設定であることを。

恐怖のあまり時間の感覚が無くなったのかと思うほどあっという間に侵入者は男の前へ到達しており、男が悲鳴を上げながら再度後へと退く。

が、虚しくも男のすぐ後ろには屋敷の立派な壁が迫っていた。

背中の鈍痛を感じ、男のわずかな希望を灯していた表情が絶望へと暗転する。

「ま、待ってくれ！私の金ならやるから！  
頼む！見逃してくれ！」

男が映画の小物役のようにベタな台詞を言う。

だが侵入者はそれを無視して男の胸倉を右手で勢い良く掴み、自分の前へと持ち上げた。

「や、やめろ！」

「この屋敷に保管されてる質量兵器は何処だ？」

言わねエとテメエの首と胴体がオサラバするぜ？」

侵入者がロングコートの背から取り出した50cm程の二振りの本刀の刃を男の首に当てる。

刀身に完璧に怯えきった男の表情が映された。

「え、ND3214、DF681だ…」

要求は呑んだらう！？は、離してくれ！」

「ああ、いいぜ」

服の胸倉を握る手がスツと離れ、男の顔に再び安堵の表情が浮かぶ。

ズシャアッ！！

凄まじい音とともに壁一面に血飛沫が飛び散り、

男の喉に鮮血に覆われた真一文字の切り傷がゴボリと血を噴き出す。呼吸器官を切断された死体がズルリと地面に倒れ伏した。侵入者はそれを見ると仮面の奥で笑みを浮かべながら、二振りの刃をスツと横に払い刀身についたを血を薙ぎ払う。

《リオネ、ND3214 DF681》

《はい。現在その座標にシステムを通して転送魔法を仕掛けてますよー

ブラッド、あなたは帰ってきてくださいね》

侵入者　もといブラッドは念話の相手の少女リオネの応答を聞き終えると、

ハアと溜息をついて仮面では覆いきれていない後ろ側にある灰色の髪を乱雑に掻いた。

《大体よ、俺が行く必要あったのか？

ハッキングして転送魔法仕掛けるだけならお前でもできんだろ》

《それだと向うのセキュリティシステムが騒ぎ出すんですよ。

管理局の裏の方に連絡されても困りますし、

それに暇だ暇だってソファに寝転んでたのは誰でしたっけ？》

《チツ》

舌打ちをしながら裏口へ続くドアを開け、

屋敷の火炎から排出された大量の火の粉が舞っている夜空の下へと出る。

頭上だけを見れば幻想的と言えるだろうが、

屋敷や男が脱出しないようしかけたTNT爆弾の火薬の臭いがあ

りに充滿しており、ブラッドの仮面の下の鼻を硝煙が擦る。

二振りの小太刀を腰に付けた鞘に納め、右手で仮面の血を拭い落した。

本人は血糊をそこまで気にするタイプではないが、帰った後リオネに近寄るな出ていけ的な意味でギヤーギヤー騒がれるからだ。

ちなみにリオネの感覚は正常である。常識人は苦勞します。

ブラッドが欠伸を漏らしながら車一台も通らなくなった深夜の道路に歩み出る。

「来い、COL」

彼の呼びかけに答えるかのようにグローブの上に付けた腕輪が光り出す。

そして一瞬のうちに彼の目の前に大型のバイクを出現させた。

ヒョイと軽くそれに跨ると、

鳥すら目を覚ますようなエンジンの爆音が屋敷の炎に負けじと響いた。

無骨なデザインの車体が素早く動きだし、

猛烈なスピードで真夜中の道路を爆走していく。

見る見るうちにブラッとおとそのバイクの姿は夜の闇に包まれて見えなくなる。

だが、その狂気の笑い声は長い間その場所に残っていた

これが、有る世界の本来の物語を大きく狂わせた  
マサクリ・ブラッド《血の虐殺》の物語のプロローグである。

## 『報告』

時空管理局・巡航Ⅰ級8番艦アースラより管理局情報管理部への  
ポルディ邸惨殺事件に関する調査報告

本次元空間航行艦船は本局の臨時指令に従い、  
ミッドチルダ高級住宅街にて発生した惨殺事件に執務官クロノ・ハ  
ラウンを報告責任者とした臨時調査団を派遣した。

調査団が現場に到着した当時の屋敷の状態はほぼ全壊に近く、  
広大な屋敷のほぼ全てが全焼、破損していた模様。  
発見された遺体は約47名

検死官によると遺体のほとんどは焼死ではなく  
魔力弾による銃殺、デバイスによる斬殺等が死因であるとのこと。

また詳しく調査した結果その全てに同じ魔力反応を検出。  
その為これらの殺人は一人もしくは殺戮用兵器が行ったと考えられる。

屋敷の内部からは違法なクローン研究施設や取引の証拠が残されており、

ボルデイ氏は不特定多数の相手と質量兵器密売を行っていた。  
しかし現在質量兵器は発見されておらず、  
確実な証拠や痕跡は未だ未発見のままである。

本艦アースラはこれより本局の指令に従い、  
管理局上層部より派遣された機動捜査隊にこの件を委任する。

総責任者及びアースラ艦長  
リンデイ・ハラオウン

**Bullet・01 その男、不死身につき（後書き）**

感想にてご意見、アドバイスお待ちしております  
誤字報告なども受け付けております

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1719ba/>

---

魔法少女リリカルなのは ~ Masked vandals crazy ~

2012年1月4日11時46分発行